

ご意見は〒104・8243読売新聞東京本社教育取材班へ。
ファクス03・3217・9908、メールkyouiku@yomiuri.com

学ぼう



変化への対応力 どう養う

■ 今年の主な設問

- ▽意欲や目的意識を持った学生を育てる取り組み
- ▽入学前教育
- ▽初年次ゼミ
- ▽全てを英語で行う授業
- ▽ボランティア活動・インターンシップ・海外留学の単位認定
- ▽転学部・転学科・再入学制度の有無
- ▽学習支援センターの開設
- ▽学生同士の相互支援制度
- ▽発達障害支援
- ▽奨学金
- ▽入試方法別入学者数、小論文・グループディスカッションのテーマ
- ▽退学率、標準修業年限卒業率
- ▽教育に関する情報公開
- ▽卒業生の就職・進学状況
- ▽東日本大震災への対応など計約50項目。



調査内容について討議する検討委員たち(3月28日、読売新聞東京本社で)

◆大学の学力検討委員会
調査は、大学の学長経験者や教職員、高校教諭ら10人で構成する「大学の学力検討委員会」

会に、設問の設計から分析まで幅広く助言を得て行っている。検討委員の顔ぶれは次の通り(50音順、敬称略)。
▽天野郁夫・東京大名誉教授▽井下理・慶応大教授▽小方直幸・東京大准教授▽小田隆治・山形大教授▽絹川正吉・元国際基督教大学長▽清成忠男・元法政大総長▽座長▽沢田進・元大学基準協会参与▽千葉吉治・全国高等学校進路指導協議会事務局長▽福島一政・愛知東邦大理事▽横田利久・元大学行政管理局会

大学の学力 調査始まる



職人からコテの使い方を教わる鈴木美穂さん(10日、東京・世田谷区で)＝富田大介撮影

画を練る。同社の豊田建・人材採用センター長(48)は「会社が欲しい人材を採用するにはまず、大学でどのような授業が行われ、どのような問題意識を抱えているかを共有する必要がある」と話す。

同社によると、最近の新入社員には、主体性や実行力など「前に踏み出す力」が欠けていることが、採用内定後から始まる社員教育育成プログラムで明らかになっているという。こうした声は、他の企業採用担当者や大学関係者からも指摘されている。

結果7月掲載

そこで今回の調査では、学内での学びにとどまらず、ボランティア活動、インターンシップ(就業体験)、海外留学などの単位認定、参加学生数にも目を向けた。学外や国外での活動を通して、学生は自分自身を見つめ直し、大きく成長すると言われているからだ。

高校や受験生からの要望を受け、学部別の取り組み状況を尋ねる設問も増やした。カウンセラーの常駐する学生相談室の設置など、多様な学生支援体制についても聞いている。

調査ではこれまで、各大学の退学率や、入試方法別入学者内訳などを一覧表にまとめて公表。受験生や保護者、高校の進路指導担当教諭や大学関係者に高く評価されているほか、最近では、企業の採用担当者からも注目され始めている。

富士通(本社・東京都港区)の人事労務部では、「大学の学力」を「課題図書」にしながら、学生の採用計

ものつくり大学(埼玉県行田市)は、40〜80日間のインターンシップを、卒業までに1、2回履修させている。大学の学びへの動機づけを促すとともに、志望する仕事に自分にとっているかを確認し、就職後のミスを

ものつくり大学

就業体験40〜80日で自主性

マッチを防ぐ。

今年10日、東京・世田谷区の住宅新築工事現場では、左官職人を目標とする大建設学科4年の鈴木美穂さんが、ミキサーにモルタルと水を入れてかき回し、手際よく材料を作る。職人の指導を受けながら、コテを使った下塗りも体験している。

ん(21)が、2回目のインターンシップに取り組んでいる。2年のインターンシップは商店建築の左官作業を体験したが、「今度は木造建築をやってみよう」と、伊藤左官工業(東京・調布市)での実習を希望した。期間は、4月上旬から6月上旬までの実働40日間。

「インターンシップを通して、職人のプロ意識のすごさを体感できた。社会に出て恥ずかしいだけではない知識を、大学にいるうちにしっかりと身につければ」。鈴木さんは、そう言って表情を引き締める。

鈴木さんが所属する研究室の三原斉教授(49) (建築生産学)は、「インターンシップから帰ってきた学生に専門用語で質問され、圧倒されてしまうこともある。目の輝きが変わり、自分から進んで勉強するようになる」とインターンシップの効果を強調する。

※「勉強プラス」「合格ABC」「親子ホットライン」休みます。